
SEASON

にやば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEASON

【コード】

N6499S

【作者名】

にゃぱ

【あらすじ】

無気力にも学校生活を送っているが、そんな俺にも仲間がいる。周りからは相手にされないけど仲間がいる。こいつらといる、それだけでいい。

1 不変の季節（前書き）

初めまして、にやばと申します。

他のサイトでも投稿をしていますが、今回こちらでも投稿しようと思いましたが。

この作品は処女作で長編を執筆していますので、文章作法などまだまだなっていないことがあります。ご了承ください。

1・不変の季節

どのくらい眠っていたのだろうか。
全然わかんねえや。

時計見ようにも目が霞んでるし、まだ眠いから寝るかな。
なんか周りがうるさい。

でもよく聞こえない。
まあいいか、寝よ。

そう思いまた俺は瞼を閉じた。

「久しぶりだね」

微かに聞こえた懐かしい声が夢の中へ誘った。

いつもと変わらない風景の静かな街、俺はこの街で生まれこの街
で育った。

「はあ、今日は休めばよかったかな」

起きた時にはすでに遅刻確定時刻。

両親は高校入学と同時に外国に転勤でいない。
今は一人暮らしで自由にはやっている。

ただ面倒なことが増えたのは確かだ。

このまま帰るか帰らないか迷ってる間にも足は学校へと向かっている。

もう少し早く起きないとなんて考えているともう学校は目の前だ。

「結局ちゃんと来てるんだな、俺」

校門の前でそう呟き大きく息を吐いた。

学校は好きではないが嫌いでもない…

それなり友達はあるがあまり居心地のいい場所ではないから

昔は楽しい場所だった。

入学しバスケット部に入った。

新設校ということもあり伝統も口うるさい先輩もいなくて

「自分達の力で強くしようぜ！」

なんて頑張っていたが膝の故障、チームメイトとの衝突で退部した。

それ以来、居心地は良くなくなってしまった。
そしてやりたいことも無くしてしまった。

時間的にはもう3時間目ぐらい、遅刻することは慣れてしまった。
静かな廊下を音をたてながら歩く。

この学校は一応進学校らしく、しかも俺らの代が初めての卒業生となるので校律など厳しく勉強などできない奴など差別的に相手にされない。

自分の教室に近づくとでかい声が教室から聞こえてくる。

「神林！神林慶斗！なんだ、また遅刻かあいつは」

神林慶斗（かんばやしけいと）

それは俺の名前だ。

「おはようございます」

そう挨拶しながら俺は教室に入る。

「おはようございますじゃないだろ！何時だと思ってんだ！」

ヘッドロックをかけられながらほぼ毎日同じ説教を受けている。

「いててて、いてよ。丸ちゃん勘弁してくれよ」

「だったら遅刻してくるな。もう席に着け」
「そう言い解放した。」

丸ちゃん、いや丸山先生はこの遅刻常習犯を注意するこの学校唯一の教師。

そして生徒みんなから丸ちゃんと呼ばれ人気のある兄貴分な教師。

他の教師なら目を合わさないで終わっている。

こんな学校だからこそ熱血教師は人気があるのだろう。

1番後ろの窓側席が俺の席だ。

だるそうに座る俺に

「よくもまあ毎日丸ちゃんのヘッドロック受けるわね」
クスクス笑いながら話しかけてきた。

俺の前の席に座っている秋原唯（あきはらゆい）だ。

「うるせえな。あれはあれで痛いんだぞ！それに毎日じゃない。ほぼ毎日だ」

毎日ではなくほぼ毎日であること強調し反論してやった。

「変わらないわよ。痛いなら遅刻しなきゃいいじゃない」

「んなことわかってるよ。ってお前に言われたくないな」

「あら、私は遅刻してないわよ。それにこのクラスの委員長だから言う権利はあると思うわ」

「くっ…」

自信たっぷり言われ正直ここまで言われて悔しかったが唯の方が正しいので反論できなくなってしまうた。

「それに…慶がこないと…」

少し照れた様子で話した瞬間…

バーン！とすごい音をたて教室のドアが開いた。

「すみませ〜ん！遅れちゃいました。遅れた理由は2度寝の魔力にとりつかれて5度寝したからです！正直に言っただから

丸ちゃん許して」

両手併せ深々と頭を下げている男がそこに立っていた。

ツカツカと丸ちゃんは男に近づき

「お前も遅刻か！神林程ではないが多過ぎる。てんば〜っ！
必殺のヘッドロックが決まっていた。」

いやいや丸ちゃん、比較に俺を出さないでくれ。

それにそのヘッドロック、天罰じゃなく人誅だと思っぞ。

「うわ〜！丸ちゃんギブギブ！」

もうすでに泣きが入ってる。

「たくっ！五十嵐も早く席に着け」

「ういっすー！」

「なんだ！まだ反省が足りなさそうだな！もう1発いくか？」

「勘弁してくださいー！」

恐れをなした声を出しダッシュで俺の隣の席についた。

「おっはよう、慶ちゃん、唯」

満面の笑みで声をかけてきた。

こいつの名前は五十嵐拓郎（いがらしたくろう）

お調子者で楽天的

天然というか単なるバカなのかわからないがからかいがある
やつだ

「何？慶ちゃんも遅刻？毎日あれ受けてるの大変だね」

「だから毎日じゃなくてほぼ毎日だ」

またしても反論してやった。

「だからの意味がわからないよ」

「すまんすまん。さっき唯にも言われたからさ」

「耳ほじりながら言われても悪いと思ってるとは思わないんですけど

！」

ちよつと怒った顔をこつちに向けてきた

「そつえば唯、拓郎が入ってくる前になんか言わなかったか？」

「えっ？なんでもないわよ。気のせいじゃない？」

「そっか、気のせいか。疲れてんのかな？さて、寝るか」

少し赤い顔をしていたが机にむたれかかり目を閉じた。

隣から無視しないで〜と聞こえたのは言つまでもない。

「おい！慶斗起きろ！」

まだ寝ぼけてる俺は

「う…う…ん」

そう答えることしかできなかった。

「早く起きろよ！早く学食行かないと混みまくりだろうがよ」

まだ完全に目覚めてない俺を引きずりながら学食を目指すこの男…
いつも頭にはバンダナを巻いて、首にはネックレスをつけている
明るくとても変な奴だ。

10

「んだよ、もうちょっと寝てたかったのに」

不機嫌に俺はそいつに話しかけた。

「そうだな、やっぱ昼飯はラーメンに限るっしょ」

……………はあ

毎度のことだがちゃんと話を聞いてない。

こいつの名前は橋爪竜祈（はしづめりゅうき）

俺や拓郎、唯とはクラスは違うがいつもうちのクラスに来て休み時間が終わると自分のクラスに戻っていく。

自分のクラスにいるのはあまり好きじゃないらしい。

確かにクラスで楽しそうにしているところをあまり見たことはなかった。

なんとなくわかるが…

「なあ慶斗、今日の放課後何してんだ？」

竜祈が尋ねてきた。

「相変わらず何もないよ。やりたいことないし、家帰ってぼろぼろしてるぞ」

「んじゃ俺も相変わらずお前ん家でぼろぼろとするかな。拓郎は？」

「ん？僕も慶ちんここでぼろぼろとするかな。唯は？」

「そうね、慶のこの漫画全部読んでなかったからお邪魔するわ」

「お前らまたうちで暇つぶしかよ！他になんかはないのかよ？」

「ねえいわよ」

同時に言われたがそれそれないことがはつきりとわかる。

「ったく、まあいいか」

2年になつてからの放課後の恒例行事

>俺の家で何かをする<

他にも何か面白いことがあるような気がするがやることがないのでよしとしている。

俺は部活を退部しているからただ家に帰っているだけなのだが…

竜祈は家に帰ると気が滅入るらしく寝に帰っているだけらしい。

拓郎は親が離婚し新たな父親とうまがあわず祖父母のところで厄介になつているが気をつかつて疲れてしまつらしく寝静まるまでは帰らない。

唯は2人と違って両親と仲が良くちゃんと家に帰っているが高校に入ってから自分の意

思で行動し色んなことを学べと言われ注意を受けることはなく俺とつるんでるのが楽しいらしく共に行動していた。

俺らはいつも4人である。

学校の奴らは勉強ばかりで面白くなく真面目な奴らだ。
しかも遅刻常習犯2名、服装違反1名。
ちよつとしたつまはじき扱い。

唯に関しては昔に変な噂をたてられ孤立していた。

1年の時はみんなクラスはバラバラだったが、ある事件をきっかけに集まり今に至るようになった。

そんなことから俺達は不良4人組と言われている。
学校内でも有名ならしい。

かと言って反論するつもりもさらさらない。
遅刻常習犯、服装違反、それに混じる女子。
周りから見たらそうなのだろうと4人共納得しているから。

「そういえば拓郎知ってたか？」

「うぶ？ばびぼ？」

焼きそばを口いっぱいにはづぶる拓郎に俺は話しかけた。

「焼きそばにマヨネーズかけるとうまいらしいぞ」

目の前にある焼きそばに大量にマヨネーズをかけてやった。

「あ〜！」

悲鳴をあげた。

焼きそばを乗せていた皿は輝かしくマヨネーズで覆われた。

「いや、ケチャップだろ」

竜祈がその上にケチャップを振り撒いた。

焼きそばを乗っていた皿は日本の国旗とかす。

「やっぱり焼きそばならソースじゃない？」

さらにソースをトッピング

もはや食べ物には見えない。

青ざめた顔し涙目の拓郎が固まって座っている。

それを見て3人が笑う。

「僕の焼きそば…焼きそばが…」

やっと言葉を発した。

「くっ…上手そう！上手そうっすよ〜！」

皿を持ち上げ一気に平らげた。

唾然とする3人の前にマヨネーズ、ケチャップ、ソースが顔中ついた拓郎があらわれまた爆笑した。

拓郎をいじる、からかうも恒例行事となっていた。

「うっ、きぼちわるい〜」

学食から帰ってきた拓郎が机で寝ている。

「あんなもの食べるからだろ」

「そうよ、バカじゃないの？」

「あんたたちがかけたんでしょ！僕の焼きそばが…焼きそばが…う
うっ…」

拓郎にとって焼きそばは恋人のようなものなか？

「うるさいわね、じゃあ今日の晩ご飯は焼きそばでいいわね？」

「まじで！？やった〜！」

お前はそんなに焼きそばが好きなのかと突っ込みたいが面倒なことになりそうなのでやめた。

「慶もいい？」

「ああ、いつも悪いな」

「材料買っていくわね。洗剤とかもなくなりそうだったよね？ついでに買ってくわ」

「助かるよ。ありがとう」

「いいわよ礼なんて。好きでやってるんだし私達の仲じゃない」

唯は嬉しそうに笑っている。

俺はいつもそんな唯に甘えてる。

うちに来る時には飯を作ってくれたり家事全般をしてくれる。本当に助かる存在である。

授業終了のチャイムが学校中に響きわたると帰宅するもの、部活にいくものそれぞれの声で賑やかになる。

「慶ちゃん帰ろうぜ」

ワクワクを抑え切れない子供のような拓郎。

「ああ」

「買い物して後から行くわね」
世話をやくのが好きな姉さんの唯。

「ああ、気をつけてな」

「おい！お前ら早く行こうぜ！」

先頭にたつて何かをし始める鉄砲玉のような竜祈。

たまに唯がない時があるがいつも変わらない会話を交わしいつもと変わらない帰り道を変わらない友達と歩きいつも集まる部屋にいる。

「おまたせ、さあ食べよ」

「やつほ！焼きそばだ！」

「拓郎知ってたか？焼きそばにマヨネーズを…」

「何もかけなくていいよ！」

みんなで夕飯を食べるのもいつものこと

>いつものこと<

それは俺にとって大切な居場所なんだと思う。

1・不変の季節（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

この章は書き始めなのでどう書けばいいのかなあっと模索しながら書きました。

序章中の序章なので主人公等の紹介で終わってしまってますみません。

うーん、後書き書くの初めてなものでこんな感じでいいのかしら？

2・始動の季節

固く扉が閉められた。

いくら叫んでも開くことはなかった。

この扉が開く魔法の言葉があるなら教えてくれ。

「なんなんだよお前ら！大丈夫だって！全然できるんだ！膝なんて痛くないって！」

俺は何度もそう叫んだが開くことはない。

この日から俺は独りになってしまった。

毎日の登下校、仲良く話す人間達、一緒に飯を食う人間達…

吐き気がした。

何もないこの檻から出たかったが方法がわからない。

「なんでこんなところに来てるんだろっ？」
入学して早々口癖になってしまった言葉。

起きるのが遅くなり誰もいない通学路を歩く。

教師のさえずりと周囲の白い目に迎えられ席に着き、教室に響きわたる子守唄で眠りにつき、終わりを告げる音で来た道に戻る。

こんな毎日がただ流れていた。

惰性のような日々だ。

いつもの通学路、誰もいない通学路。

「はあ、近くの学校を選んだはずなのにな」

あまりにも遠くに感じている。

「うん？珍しくこの時間に人がいるな」

校門とそこで立ち尽くしている生徒が見えはじめた。

「見たことない奴だな」

同じ校章の色のバッチをした女の子の隣を通り過ぎた。

「なんでこんなとこに来ちゃったんだろう」

誰かの口癖が女の子から聞こえた。

俺以外にもその言葉を漏らす人間がいるんだと驚いた。

「なんでだろうな」

俺はそう呟く。

この日からいつも日常に新たなイベントが加わった。

校門の前に立ち尽くす女の子の隣を通り過ぎる。

これといって変化があるイベントではない。

ただ同じような人間がいることが嬉しかったのかもしれない。
相変わらず檻から出られない俺ではあったが…

女の子と話すことはなかったが機会はいくらでもある。

しかし、人と接するのが面倒になっていた俺はその機会も流していた。

休み時間に聞こえた楽しそうな話、学校中で噂になっている話もあまり耳に入ってこない。

そんな日常が何日か流れたある日

「あっ！寝過ごした！」

起きた時には放課後。

夕日で染まった生徒のいない教室に独りになっていた。

「どこでも寝れるのも問題だな」

丸めていた体を伸ばしあくびした。

「さて、家帰って寝るかな」

カバンを持ち廊下に出るとクスンクスンと泣いている声がする。

「やばい、これが学校の怪談…気にせず歩くべきかダツシユで駆け抜けるべきか…」

っと考えながら歩いた。

泣き声は2つ隣のクラスからしていた。

「まじかよ、確認するかな、しない方がいいかな」
っと考えながら教室の中を見た。

そこには夕日に染まった女の子が一人で座って泣いていた。

「おっ、おい」

思わず声をかけていた。

女の子は驚いた顔でこっちを見た。

多分誰もいないと思っていたのだろう。
涙を拭いて顔を上げ笑って

「あはは、すいません。すぐに帰ります」

「いや、俺教師じゃないけど…」

「えっ？本当だ！ごめんなさい、間違えちゃった」

夕日で染められた頬がさらに紅くなっていた。

「まあいいけど。泣き声聞こえていたから気になってな」

「そうよね、ごめんね。あれ？最近よく校門ですれ違う人だよね？」

最近？校門？すれ違う？

そんなイベントがあったような？

女の子に近づき通り過ぎてみた。

その行動に女の子は頭の上に？がでてくるような顔した。

「あゝ！校門のところで立ち尽くしてる子が」

「そうよ、あなたはその子を通り過ぎる人でしょ？」

「ああ、そっだよ」

「やっぱり。まさかこんな場所で会うなんて不思議ね」

「不思議だな。校門でしか見たことなかったからな」

「そうよね。不思議ついでになんでさっき通り過ぎてから気づいたの？」

「同じシチュエーションじゃないと思いつけなかったから」

「ぶっ、変な人ね」

「変とは失礼だな！」

「ごめん、じゃあおかしな人だね」

「同じじゃないかよ！」

女の子は笑っていた、つられて俺も笑った。
こんなに笑ったのはいつ以来なんだろう。

いつもと変わらない誰もいない通学路を歩く。

いや、変わったことはある。

校門で立ち尽くしていた女の子と校門から教室近くまで一緒に歩くことが増えた。

たいした会話もせずただ歩くだけだったが、同じ口癖をもつ女の子といることは苦痛ではなかった。

そういえば名前知らなかったな。

いつも「なあ」とか「ねえ」で会話を始めていたから気にしなかったがたまに呼ぶ時困ってしまう。

聞いたとしてもいいか。

「なあ、お前の名前聞いてなかった」

また「なあ」から始まっていた。

「私も聞いてなかったね。今までよく話せていたもんだわ」

そう言って笑った。

「俺もそう思ったよ。話すようになって名前知らなときつくなってくる」

「確かにね。それじゃ改めて私、唯。秋原唯。よろしくね」

それからはお互いを苗字で呼び合うようになり、次第に冗談も言える仲になっていった。

だけど少し気になることがある。

俺が秋原に会うときは決まって1人でいた。

そういう俺も1人だったが秋原が1人でいるのは不自然に感じる。たまたまその場面に出くわしているのだろうか。そんなに考えてもしようがないか。

「気づけばもう放課後。

「さて、帰るか」

帰り道を歩いていると背後から秋原の声が聞こえてきた。

「神林君、待って！」

息を切らせて追いかけてきた。

「どうした？トイレでも行きたいのか？」

「違うわよ！今度どっか遊びに行かない？」

「誰が？」

「神林君が」

「誰と？」

「私と」

「まじで？」

「まじで」

突然の話に驚いてしまい変な回答をしてしまった。

「別に構わないけど」

「それじゃ今度の日曜は空いてる？」

「空いてるけど」

「じゃあ決まりね。行く場所はどこでもいいかしら？」

「ああ、任せるよ」

「決まったら教えるね」

長く伸びた2つの影が道を歩いている。

「帰り道で一緒になるなんて初めてだね」

「そうだな。初めて会った時は先に帰ったからな」
「ちよっと前のことなのにずっと昔の事のようにだ。」

「そういえば知ってるかしら？この学校に幽霊がでるらしいわよ」

「俺は秋原がそうだと思ったよ」

「まさかあの時？」

「あの時だ」

「私も声かけられた時ビックリしたわよ」

「あの驚き様は面白かったな」

「失礼ね、本当にビックリしたんだから」

「悪い、それで幽霊がどうしたって？」

「なんだったかしら？とりあえずたまに出るって話よ」

「ふん」

いつの間にか2つの影の間隔が近くなっていた。

これも幽霊の仕業なのだろうか？

「あつ、私こつちだから。バイバイ、また明日ね」

「じゃあな、気をつけてな」

秋原は手を振り駅のほうに向かって歩いていった。
俺はそれに答え小さく手を振り背をむけ歩き始めた。

その途中、俺は気づいた。

「2人つきりで遊ぶのか？」

いつの間にか嬉しさと不安の間で揺れていた。

「やべえ、緊張してきた」

辺りの風景がいつもと違う感じがする。
時間が早く流れているようだ。

ぎくしゃくしながら歩き家に着いたが家の中までもが違う風景に
感じる。

緊張のあまり寝るのが遅くなり起きたのも昼過ぎになってしまっ
た。

学校に行くか迷ったが明日は土曜だからどうするか聞けないと思
い向かうことにした。

学校に近づくにつれてどんな顔をあわせればいいか迷ってきた。

色々考えていたら教室に向かっていった。

「神林君、ちょっと遅すぎじゃない？」

「へっ？」

勢い良く振り向いた。

つと同時に秋原から笑い声がもれた。

「どうしたの？すごい顔していたわよ」

一体どんな顔をしていたんだ。

「もう来ないかと思ったわよ」

「悪い、寝れなくてな」

「そうなんだ。意外とかわいいところあるのね」

「何がだよ!」

「なんでもないわ。それでね日曜なんだけど買い物に付き合ってくれない?」

「別にいいけど」

「よかった。それじゃシンシアモール中央の噴水で1時に待ち合わせね」

「わかった。もう授業始まるから行くな」

「うん、じゃあね」

授業に出ようと教室にむかったが秋原に日曜のことを聞いたことで足は家に向かっていた。

家に帰り適当に時間を潰す。

いつも寝るまでの時間は退屈でしょうがない。

「日曜はどんな服を着ていくかな」
おもむろにクローゼットを開けた。

「しまった！全然洗濯してなかった！」
クローゼットの中の洗濯物の山を片っ端から洗濯機につっこみ急いで洗って乾かす。
天井が洗濯物で見えなくなってしまった。

そして半濁きの臭いの中寝るはめに。
これからはこまめに洗おうと心に決めた。

約束の日曜日…

時刻は1時半…

遅刻だ！

寝る前に緊張し始めて寝れなくなってしまった。
寝たのは朝方。

この時間に起きたのが奇跡に近い。

待ち合わせはシンシアモール中央にある噴水。

シンシアモールはこの辺の町の人が買い物に集まるなんでも揃っているシヨッピングモールだ。

人が多くて苦手だ。

何よりこの急いでいるのに走りづらい。

やっと噴水が見えてきた。

ベンチの方に目を向けると秋原が暗い顔をして座っていた。

「今日も遅刻なんだね」

「悪い、急いできたんだけど遅れちゃったな」

「予想通りなのが笑えるけどね」

「予想通りなのかよ」

「だっていつもじゃない？予想できるわよ。疲れてるみたいだからここでちょっと休んでから行きましょ」

暫くベンチに座って話をした。

何が好きなのか、何が嫌いなのか、昨日見たテレビの話。たわいもない世間話だけどもとても新鮮に思えた。それに学校では見たことがない笑顔が咲いていた。

「そろそろ行きましょ」

立ちあがりモール内を探索。

欲しいものがあるわけでもなく目についたものを手に取ったりお互いの服を見合ったりしながら歩き続けた。

「これ可愛くない？」

「どれ？へへ可愛いつていうよりかっこいいな」

「絶対可愛いよ！」

「いやかっこいいだろ！」

睨み合う2人

「うん、どっちにしてもいいわよねこれ」

「いいと思じよ」

「買っちゃおうかしら？」

秋原は気に入った靴を手に微笑んでいた

「いらつしゃいませ、よかったら履いてみて下さい」
店員の必殺の一言が出た。

椅子に座り靴を履き始めた。

「やっぱりいいわね。神林君どう？」

「そうだな、ちょっと立ってみてくれよ」

立ちあがった姿を見たが何かが足りない。

「ちょっとポーズとって」

「恥ずかしいんだけど…」

「いいからやってみてくれ」

恥ずかしそうに秋原はポーズをとった。

確かに靴屋でポーズをとるのは見ているも恥ずかしい。

「彼氏さん、どうですか？」

店員が絶妙なタイミングで入ってきた。

「いや、自分彼氏とかじゃないんすけど」

「ふふっ、彼氏に見えてるみたいね。どうだった？」

「いいと思うよ。似合ってるよ」

「じゃあ買っちゃおう。すみません、これ下さい」

「有難うございます」

俺は先に店を出て待つことにした。

「お待たせ」

大事そうに箱を抱えて出てきた。

本当に満足した笑顔、まるで子供のようだ。

「よかったな、嬉しさ隠せてないな」

「そんなに出てる？気に入ったものを買った時ってすごい嬉しいのよね」

「わからないでもないな」

「記念品になるかもね。あまり汚したくないから履かないでいるかな」

「買った意味なくなるな。履いてやれよ」

「嘘よ。でも大切に履くわね。なんか大事な時にか」

「勝負靴になるのか？」

「なんか表現悪いわね。でもそういうことにしときましょ」

大事な時に履く靴か。

昔に俺も同じようなことをした気がする。

「美味しいね、これ」

「ああ、結構いけるな」

帰る前に夕飯を食べようとレストランに入った。
家に帰っても飯はないから調度良かった。

「ふ〜、ごちそうさん」

腹が減っていたので一気に食べ食後のお茶タイムに突入。

「神林君ってすごい食べるのね。それに早いし」

「腹減つてたからな。男ならこれぐらいは食べるだろ」

「そうなんだ。1つ勉強になったかな」

「それにしてもなんで俺を誘つたんだ」

「うん？」

「だからなんで今日俺を誘つたんだ？」

「友達なら普通じゃない。嫌だつたかしら？」

「そういうわけじゃないけど俺以外にもいるだろうに」

「う…うん。まあね。でも神林君と遊んでみたかったからかな」

なんとなく納得できなかった。

声の様子がおかしく感じたからだ。

「今日はありがとう。楽しかったわ。また明日ね」

「じゃあな、また明日」

秋原と別れ家に向かう。
さすがに今日は疲れた。

人ごみの中をずっと歩き回り女の子と一緒にいるという慣れない環境。

全てがいつもと違っていて疲れてしまったがここ最近にない充実した1日になったな。

明日はどんな1日になるのだろうか、またつまらない惰性のような日々が続いてしまうのだろうか。

そう思ったらまた毎日がつまらなく感じてきた。

久しぶりに2時間目に間に合う時間に校門ついた。

「なんでこんなところにきたんだろう?」

またいつもの口癖が聞こえてきた。

「なんでだろうな」

「神林君、おはよう」

「ああ。さっきのは口癖か?」

「えっ？何？私何か言ってた？」

「ああ、なんでこんなところに来たんだろってな」

「そんなこと言ってたんだ。全然気づかなかったわ」

「俺と違って学校に友達ぐらいいるだろ？」

「いるって言えばいるけどいないって言えばいいかしら。ごめん。先急ぐね」

そう言い残して秋原は走っていった。

俺は外を見ながら考えていた。

秋原唯…

何故あいつは校門の前で立ち尽くしているんだ。

何故あの口癖があるんだ。

あいつは俺より明るく優しい性格なんだから友達だっているはず

だ。

はつきり言っつて美人だと思う。

だからかなりもてるほうだと思う。

それなのに俺なんかと仲良くなっている。

不思議なやつだ。

「ん？もう昼休みか」

考え事している間に時間がたっていたようだ。

「今日は何にするかな」

俺は一人で学食に向かう。

その途中、秋原のクラスをチラリと見た風景はそこには机をくつつけて昼飯を食べ笑い声が響く輪から外れて一人で昼飯を食べているあいつの姿だった。

あまりにも衝撃的な風景だった。

あんな明るい顔で笑うあいつがあんな暗い顔で一人で飯を食ってるなんて

どういふことなんだろう。

そついつ気分なのか。

それならいいがあんな顔をみるのは教室で泣いてる姿を見て以来だ。

あとは笑ってるところしか見ていない。

俺は気になり声をかけようと思ったが今度合った時にでも聞けばいいやと思ひ学食へ向かった。

ドン！

何かにぶつかった。

前を見ると背の高い男子生徒。

「いってな、おいてめえ！どこ見て…おっと、悪いなケガとかな

いか？俺の前方不注意だな」

明らかにキレそうな顔、無理して抑えてるみたいだが顔にあらわれ
れる。

拳は握られているのも見えた。

こいつ…やばいのか？
なんか迫力あるし怖い。

「うん？なんだ？俺の顔になんかついてるか？」
ガンをとばされてる。

怖いって…

「いや、こつちこそ悪かったな。すまん」
謝つとけば大丈夫だろ。

「いいんだ、気にするな！んじゃな！」
叩かれた肩が痛い。

肩をさすりながら学食に向かった。
相変わらず賑やかな声に学食はうまっていた。

今の俺には雑音、いや騒音にしか聞こえない。
居心地の悪いところではあるが空腹には勝てない。

「何にするかな？今日の気分は…」

「やっきつそば！やっきつそば！」

後ろから焼きそばが大好きな男が来たみたいだ。

「やっきつそば！やっきつそば！」

気付くとその声しか聞こえなくなっていた。

あれだけ騒がしかったのに何故だろうか？

「お兄さんは何するんだい？」

学食のおばちゃんに呼ばれ現実に戻った。

「じゃあ、焼きそばで」

どうやら後ろの奴の影響を受けてしまったようだ。

「あいよ。おまたせ！」

「どうも」

座るところ探すために辺り見渡した。

つとその時

「え〜！なんで？本当に〜？」

やたらとでかい声が聞こえてきた。

「ごめんね。さっきのお兄さんで最後だったの」

「僕の焼きそばが…焼きそばが…」
そんなに食べたかったのか。

焼きそばを連呼していたぐらいだしな。
それにしてもすごい落ち込みようだ。

膝と手をついてうなだれてるのなんてテレビでしかみたことがない。

「うつうつ、焼きそば…」

「おい！俺のやるから金くれ」
可哀相だからやることにした。

なんだ、こいつ、頭が眩しい。

この学校にこんな髪の色をした奴いたのか？

「まじで？ラッキー！ほいお金」

そいつは俺に金を渡し焼きそばを受け取ると猛ダツシユで席に着いていた。

俺は渡された金で飯を買いそいつとは違う席に着いた。

気付くと騒音が戻りそいつはいなくなっていた。

「あいつとなんか関係があるのか？」

今日は色んなことがあったなあ。

俺は家のベッドで横になりながら今日の出来事を思い出していた。

暗い顔した秋原。

廊下でぶつかったキレるのを抑えるのに必死な男。

焼きそばが大好きな男。

「1日で思い出せることが3つもあるなんて久しぶりだ。
つまらない人生を送ってるんだな、俺って」
呟いた方がいいが虚しくなった。
ついでに腹もへって来た。

「晩飯でも買いに行くか」
晩飯を買いに向かうことにした。

近くのコンビニまで歩いて向かう。
人通りの少ない道を選びながら歩いている。
地元の人間に会うのが嫌だったからだ。

「バスケットまだやってんだろ？調子どうだ？」
なんて聞かれそうで嫌だったからだ。

少し歩いていると自販機の光に照らされた柄の悪い集団が見えは
じめた。
絡まれたら面倒だなっと思えば反対側に渡りコンビニへ向かう。

買い物済ませ同じ道を歩き家に戻る。

一人飯を食いながら柄の悪い集団の話していた話を臆げながら思い出していた。

いつもと同じ時間に登校。

誰もいない通学路。

「ふあく眠い」

フラフラしながら歩いていった。

「おはよう、神林君」

振り返って後ろを見ると眩しいくらいの笑顔の秋原が立っていた。
あの暗い顔が想像できないくらいだ。

「おはよう、秋原」

「校門以外で会うのは初めてだね。珍しいこともあるわね」

「ああ、そうだな」

昨日見たことを話していいか迷っていた。

触れてはいけないことのような気がしたからだ。

「どうしたの？なんか具合悪そうじゃない。悩んでるんだったら聞かせて。解決できるかわからないけど相談相手になるわよ。私達の仲じゃない」

俺の様子がおかしかったせい心配した顔で聞いてきた。

「んじゃ、聞いていいかな？」

「うん、いいわよ」

「昨日お前が1人で飯食つてるところを見たんだ。暗い顔して…」

「あつ、ええつと…」

顔が曇ったのがすぐにわかった。

やっぱり触れてはいけなかったのだろう。

「あはは、ほらたまには1人になりたい時ってあるじゃない？それにちょっと具合悪かったのよね」

笑顔で答えていたが俺には痛々しく感じた。

「本当なのか？」

「本当よ!」

「嘘つくなよ、俺達の仲なんだから?」

「嘘じゃ…ないわよ」

曇った顔がさらに曇っていた。

「そうか、わかったよ」

これ以上は言わない方がいいだろうと思いつつ込むのはやめた。

「おつ、唯じゃねえか!」

誰かが話しかけてきた。

「竜祈…おはよう」

竜祈という男らしい。

「おう!あれ、そっちの奴は…昨日ぶつかった奴だよな?悪かったな!」

昨日とは違い笑顔だった。

「ああ、別にいいよ。俺も悪かったし。でも最後に叩かれた肩は痛かったぞ」

「いや、叩いてねえぞ。優しく肩に手を置いただけじゃねえか」

「それでも痛かったんだよ」

「それは悪い！気をつけるよ」
昨日のぶつかった人間と同じ人間なのかと疑ってしまっぐらいの
態度だった。

「えっ？2人知り合いだったの？」
不思議そうな顔で聞いてきた

「ああ、もうマブダチだぜ！なあ相棒？」

「昨日ぶつかったただけだろ。お前のことは何も知らない」

竜祈という男はぶつかっただけでマブダチになれる奴らしい。

「ほらな、こんなに仲がいいんだぜ」
そっつい俺の体を強く引き寄せてアピールした。

「こいつ話聞いてたのか…」

「神林君、竜祈のこと本当に知らないの？」

「ああ、まったくな」

「ひでえ言い方だな、相棒！」

「相棒じゃないって！」

こいつ話を本当に聞いてないんだな。

「それじゃあ私から紹介しとくわね。この人橋爪竜祈、同じ中学だったの」

「よろしくな相棒！呼ぶ時は竜ちゃんでもいいぞ」

「そのでかい体で竜ちゃんはないだろ。適当に呼ばさせてもらっよ。それに相棒じゃない」

「こっちが神林慶斗君。私の遅刻仲間って感じね」

「よろしくな」

「よろしくな、慶斗。仲良くなれそうだな」

「どうだろうな」

「じゃあ俺先に行くな。あんま一緒にいるのもあれだからな」

一瞬竜祈の顔が暗くなったような気がした。

「唯を頼むな」

そう俺に呟いて去っていった

「竜祈のこと本当に知らないの？」
改めて秋原に聞かれた。

「今名前を知ったぐらいだ。なんかあるのか？」

「ううん、別にないわよ。さあもう行くかうか」

「そうだな、眠いし行くか」
また2人で学校に向かう。

「あとは拓郎か…」

「ん？何？」

「何でもないわよ。独り言」

「そうか」

こいつは何かを隠しているのがわかる。
突っ込むのをやめようと思っていたが気になり始めた。

秋原と別れ自分の教室に着き早速寝ることにした。

夢の中なのか現実なのかわからないが昨日聞いた話が聞こえてきた。

「この学校に…来てる…隣の隣の町…すごい有名…暴れまくった…不良…すぐキれる…友達…やられるかも…」
ちゃんと聞いてないし覚えていないからどうという意味だかはわからない。

起きた時にはすでに昼休みとなっていた。

「俺の睡眠能力は素晴らしいものがあるな。さて学食でも行くか」
学食に行くため廊下に出る。

秋原の事が気になりましたまたクラスを覗いた。
昨日見た風景がまたそこに広がっていた。

「おい、秋原」

気付くと俺は教室に入り秋原に声をかけていた。

「えっ？あつ、神林君、どうしたの？」

「今日も一人で食べたい気分なのか？具合悪いのか？」

「う、うん。そうよ。だから一人にしてくれない？」

「なんか嘘くさいな」

「いいから、早く」

何か隠してる感じだった。

遠くの方から気になることが聞こえてきた。

「あれが噂の遠くの町からきた不良？」

「違うわよ！入学してちょっとぐらいにこの教室にきた大きい人よ」

「じゃああの人はその下の人かしら？」

「どうなんだろう？それって金髪の人でしょ。でもそうならあの人も関わるのは危ないわね」

まったくと言って嫌な話だ。

知らない奴に関わらない方がいいなんて言われたくない。

でもあの人もってどういう意味…

「神林君、ごめん！私と仲良くしない方がいいわ。これからは話しかけないしかけないで。あなたに迷惑かけたくないから」
「そういい俺の手を引き廊下に連れだし教室に戻って言った。」

「なんなんだ？あいつ」

無性に腹がたつたが腹が減ったので学食に向かった。

昼休みも終わりの方もあり学食は閑散としていた。

「あいよ、お兄さん何にする？」

「そうだな、今日は…」

「おばちゃん！焼きそばちょうだい！」

「Jの声…」

焼きそば…

金に輝く眩しい頭…

「お前は昨日の焼きそば男！」

「そう！何を隠そう僕はヤキソ ン！って古いじゃん！」

「ヤキ バンなんて一言も言っていないだろ」

「そつだよね。めんごちゃん！」
「なんだこいつは…」

「そついうあんたは焼きそば譲ってくれた人じゃないか！元気？」

「まあ元気だけど…」

「そつか。よかったら一緒に食べない？」

「構わないけど…」

「じゃあ席とつとくね」

そいつは焼きそばを受け取ると猛ダツシユで場所をとっていた。

俺も注文したものを受け取り向かえに座った。

「それでさ〜…んでね……そしたらさ……」
ベラベラよく喋る。

無人島ですつと暮らしていたのかと思わせるぐらいの話しぶりだ。

「なあ、食べるか話すかどっちかにしてくれないか？口から麺がとんでくるんだけど」

「めんごちゃん！いや〜誰かとご飯食べるの久しぶりだからさ、楽しんでね」

「そのはけ口が俺か…」

「えっ？何？」

「なんでもない」

「そっか、そういうえば名前聞いてなかったよね？僕五十嵐拓郎っていうだ。拓郎でいいよ」

今日は自己紹介DAYなのか。

「俺、神林慶斗」

「へえ〜、慶ちゃんか。よろしくね」

最初から馴れ馴れしい奴だな。

拓郎：

なんか聞いたことがある。

「拓郎っていったっけ？秋原唯って知ってるか？」

その名前を聞くとさっきまでマシンガンだった口が静かになった。

「知ってるよ。同じ中学だったし」

「竜祈ってやつもか？」

「竜祈も知ってるんだ」

「まあな、聞きたい事があるんだけど秋原が昼飯1人でたべ…」

「ごめん、先に戻るね」

そういい残し颯爽と去っていった。

一体あの3人はなんなんだろう。

秋原と同じ中学なのにあいつを避けている感じがする。
秋原が嫌われているのかとも思ったが今朝竜祈の方から話しかけてきたからそんな訳ではなさそうだ。

「迷惑がかかるから」

どどういう意味なんだろうか。

「ってなんでそんなこと考えなきゃいけないんだ！」

家中に声が響き渡った。

もう寝よ。

考えたってしょうがない。

明日聞けばいいか。

…

……

……

「寝れない」

「結局気になって寝れなかったな」

何故かあの3人に睡眠時間を削られていた。

校門の所には秋原の姿が見えた。

「よう、秋原」

声をかけないでと言われたがかけてみた。

スタスタ歩いて行ってしまった。

「おい、ちよつと待てよ」

声が聞こえてないのか聞こえないふりをしているか反応してくれることはなかった。

それから1週間……

声をかけても無視されるだけだった。

さらに1週間後・・・

秋原は学校に来なくなった。

それに竜祈と拓郎も無視するようになっていた。
さすがにムカついてきた。

もう無理やりでも話すしかないと思い引き止めることにした。

「おい！竜祈！」

相変わらず無視して通り過ぎようとしていた。

「ちょっと待てよ。いい加減シカトこいてんじゃねえよ！」
「竜祈の腕を掴み止めた。」

辺りがものすごい勢いでざわめき始めた。

「わかった、全部話すからここじゃまずい。あっちに行くぞ」
竜祈に連れられ空き教室に向かった。
どっしりと座っていたが竜祈の顔はこわばっていた。

「それで何が聞きたいんだ？」

「秋原のことだよ。なんであいつは1人で飯食ってたんだよ？あいつなら友達を作るだろ！なんで学校に来なくなった？唯を頼むってどういう意味だよ！」
今までたまっていたことを全てぶちまいてやった。

「そんなに一気にいうな。俺の頭じゃ理解しきれねえ。順をおって話してやる。お前：俺の事しらねえって言ってたよな？」

「知らなかったね。そんなことどうでもいいだろ。質問に答えろ」

「慌てんな。それにどうでもいいことじゃねえんだ。ちょっと関係あるんだ」

「そっか悪いな。話してくれ」

「ああ、この学校に遠くの町からすげえ不良が来てるっていう噂聞いた事ないか？かなり有名な噂らしいが」

「臃げながらだけどな」

「お前ぐらいだよ、真相を知らないのは…その不良ってのは俺のことなんだ」

「俺は中2の時荒れていたんだ。そりゃ中1とかの時はまともな学生だったぜ。まあそれはいいとして、荒れてた俺は目があうやつ、気にいらぬやつ、連れにちよっかいを出すやつ、そんなやつらを片っ端から潰して回っていった」

「お前そんなだったんだ」

「ああ、そんなことばかりやってたら連れもお前にはついていけねえって離れていったよ。笑えるよな。連れのためにやったこともあるのについていけねえってな」

「ひどいやつらだな」

「いい教訓でもあったがな。本当の仲間じゃなかったら離れてくつてわかったよ。それから俺は独りになった。はつきり言って寂しかった。だから余計に暴れ回ったんだよ」

「逆効果だと思っけどな」

「まだガキだったからわからなかったんだよ！でもな俺は独りじゃなかったんだよ」

「独りじゃなかった？」

「ああ、俺が気づかなかつただけで近くにいたんだよ」

「竜祈、ここにいたのか。あつ、慶ちゃん…」
汗だくの拓郎がドアの所に立っていた。

「拓郎、お前も中に入れよ。昔の話をしてたんだ」

「いいのかよ、竜祈。唯に止められてるじゃないか」

「秋原に止められてる…?」

「それについても話してやる。話を続けるぞ」

「独りじゃないってのは拓郎、唯がいてくれたんだ。なんで拓郎が金髪にしてるか知ってるか?」

「いや、知らない」

「こいつはな、俺の為にやったんだ。俺は不良と罵られていた。まわりから白い目で見られていたんだ。そしたらな、こいつお前ばかり注目集めやがって!これで僕も注目の的だ!とか言ってたな」

「本当にお前の為なのか?目立ちたかっただけじゃ」

「んじゃお前は目立ちたいからってやるか?」

「多分やらないな。教師とかうるさいからな」

「そうだろ。実際拓郎は結構怒られたし陰口も叩かれてたからな」

「まあね！」

「もしそうだったとしても俺は嬉しかったし俺の為だって思える」

「懐かしい過去だね」

「そして、もう1人…唯だ」

「あいつはあの性格だし、あの容姿だろ。かなりの人気者、俺とは正反対。なのにあいつはなんでみんな離れていったんだろうね。竜祈の中身を知らないからかな。私は知っているから今でも友達だっ
て思えるってな」

「僕もそれ感動した」

「口だけなら言えるんじゃないか」

「確かにな。俺もそう思った。後から聞いた話だが荒れ始めてから
もずっと話しかけていたんだとさ。ただ俺が聞いてなかっただけな
んだ。でもあいつは諦めずにずっと話しかけていたんだ。俺は2人
のおかげで独りじゃないってやっと気付いたんだ」

「それが今回とどう関係あるんだ？」

「暴れ回ったおかげで名前が知れ渡っていたんだ」

「たまたま俺達は同じ学校に入学した。俺のクラスの奴は名前を聞
いた途端誰も話してこなくなったよ」

「僕の場合はこの髪でひかれたかな」

「それもあるが俺の連れだつてのも知れ渡つてたみたいだぞ」

「あつ、そうなんだ」

「俺は拓郎は竜祈の下だつて聞いたぞ」

「僕は子分だつたんだ」

「下も上もねえよ。クラスにいれなくなつた俺達は唯のクラスに行つたんだ。そしたらな、あいつのクラスでも知ってる奴はいた。結果、馴染み始めていた唯から友達を俺が奪つてしまった。独りになることがどれだけ寂しいかわかつている俺が奪つてしまった。だから俺はこれ以上2人から友達をとらないように距離をあげた。2人の性格なら仲良くなれるだろうからな」

「でも事態は変わってないな」

「そうなんだ。でも、俺はどうすればいいのかわからない」

「なんで秋原は俺に話すのを止めたんだ？」

「簡単な話だ。お前までそんな目に合わせたくないんだろ」

「そんな気をつかわなくていいのに」

「あいつは自分が友達だと思つた奴が嫌なめにあつのがいやだと思ふ奴だからな。どんな状態だろうと友達だと思ひ続けるしな。俺が
いい例だろ」

「確かにいい例だ」

「そんな優しい奴なのに僕等の事で独りにさせちゃったんだもんね。悪い事しちゃったよ」

「いや、拓郎。お前も俺の犠牲者だよ。本当すまねえ」

竜祈の目に涙が溜まっているように見えた。

「何言ってるんだよ。気にするなよ。僕は好きでやってるんだから。竜祈や唯と話せないのが辛いけど」

「友達だと思ってる奴と話せないのは辛いよな。……………もしかして、お前達いつから秋原とそうなった？」

拓郎と竜祈は顔を見合わせて

「確か、入学してちよつとしてからだな」

「その前までクラスから離れ始めても楽しそうじゃなかったか？」

「楽しそうだったけど……」

「やっぱり……そうか……」

あれから3日後

俺は秋原の家の前に来ていた。

そう学校に連れ出す為に。

インターホンを押す。

「はーい、神林君？」

「久しぶりだな」

「そうだね。よく家わかったわね」

「竜祈に教えてもらったんだよ。さあ、学校に行こう」

「うっん、もうあそこには…クラスには私の居場所…無いから」

「いいから行くぞ！無理矢理でも連れ出してやるから。そのパジャマ姿でいいなら今すぐ連れ出すぞ」

「ちょっと、待ってよ。行くなんて私言っていないわよ」

「10…9…8…7…」

「わかったわよ、今用意するから待ちなさいよ」
バタバタと秋原は2階に上がっていった。

「まずは第1段階はOK」

しばらくすると久しぶりにみる制服姿の秋原が出てきた。

「さあ、早く行くわよ」
かなりの不機嫌ぶりだ。

久しぶりの学校に戸惑っている様子だ。

それもそのはずだ。
自分の居場所がないと思っている場所から長く離れていたんだから。
ら。

「さあ、行こうか」

「そう…だね」

秋原のクラスに着いた。

来るまでに色んな奴にチラチラ見られていたが今までとは違う様子だった。

「お、おはよう秋原さん」

「えっ？あっ？あのっおはよう」

クラスメートにかけられた挨拶に困惑していた。

教室に入っていく秋原に数人の生徒が少しではあったが声をかけている。

「んじゃ昼休みにまた来るからな」

「うん」

何故か照れながら答えてきた。

昼休み

俺は秋原の教室に向かった。

「よう、よかったな。クラスに居場所できたみたいだな。これで学校これるな」

「うん。まあね」

「まだ嘘をつくんだな。もう竜祈達から話は聞いたよ。クラスでの居場所もそうだけど本当の居場所…友達だと思ってる奴の側にいられなくなったからだろ」

「……………うん……………」

「ちよつとついて来て」

空き教室に移動しあいつらを呼んだ。

「竜祈、拓郎！」

2人がひょこつと出てきた

「久しぶりだな、唯」

「久しぶり〜、唯」

「竜祈…拓郎…」

「唯、今まで悪かった。お前の気持ちもわかんないで…」

竜祈が土下座をして謝っていた。

「ごめん、唯」

一緒に拓郎も土下座していた。

「やだっ、ちょっと止めてよ」

「俺達は慶斗に言われるまで気づかなかった。俺はお前に救ってもらったとしてお前から逃げたんだ。本当なら一緒に戦ってやるべきだったんだ」

「そんな逃げたなんて言わないで… 2人の気持ちはわかってたから… わかってたけど… 私… 辛くて…」

もううまく話せなくなってしまうている。

「秋原、もういいよ。これからはこいつらと前みたいにするんではないよ。こいつら全クラス回ってお前のことを話してみたいんだ。秋原はいい奴なんだって。俺達のこととは関係なく見てくれ、絶対いい友達になれるからってな。みんなが納得したかはわからないがここまでお前の為にできる奴らなんだからもう友達だろ？」

「……うん…… 竜祈… 拓郎…… これからもよろしくね」

「ああ、よろしくな」

「よろじくうう、唯」

拓郎泣きすぎ…

それから日が暮れるまで空き教室で話し続けた

これが本来の3人の在り方なんだと実感した

「そついえば神林君も相当友達思いだよな」

「そつだな。俺達なんかより唯の気持ちに気付いてるんだもんな」

「僕、ジエラシー！」

「神林君の言葉を借りるならそこまで私の為に動いたんだからもう友達だよな？」

「おつ！そつだな！これで俺達はマブダチだ、よろしく相棒！」

「僕、ジエラシー！」

「俺はお前らのことよく知らないからなんとも言えないし、相棒じゃない！」

「つめてえ」と言つなよ

「お互い知らないことばかりなんだから今から知っていけばいいじ

やない。それに私の事引きずりだした責任はとってもらおうよ!」

「わかったよ」

「確か神林君の家近いんだよね。今からみんなで行こ」

「ちよっ、まっ……」

「よし行こっぜ!」

「慶ちんの家にレッツゴー!」

「いや、お前ら」

「神林君っていう長いから……そうだな、あっ!慶って呼ぶわね。私のこと唯でいいから」

「もうなんでもいいよ」

「じゃあ、行きますか!拓郎行こっぜ!」

「レッツゴー!」

2人は俺の家の場所も知らずに教室を出ていった。

「やっぱり失敗だったかな」

「私達と仲良くなったこと？」

「まあな」

「私は慶に会えてよかったわよ。また笑えそう。本当にありがとう
俺の頬に唯の唇が押し当てられた

「今回だからね。勘違いしないでよ。さあ行こう」

それからというものこいつらといる。
たむろうようになった。

「やっぱり唯の作る飯はうめえな」

「慶ちゃん、お茶」

「自分でとってくれよ」

「お皿洗いじゃんけんするわよ！」

「じゃ〜んけ〜んほいっ！」

「慶ちゃん、よく負けるね」

「慶斗弱すぎ！」

「慶、水出しっぱなしはダメよ！」

いつも負けるのは俺だったりする。

台所に立ちふと考えた。

こいつらに会ったことは失敗だったのか…
いや、出会えて本当に良かった。

自分の居場所もできたしな。
毎日楽しいよ。

こんな毎日が続いてほしい。

さっさと洗ってみんなのところに戻るか。

「慶ちゃん、お茶〜！」

「自分でとれ！」

2・始動の季節（後書き）

今回の話は4人の出逢いの話でした。
いかがだったでしょうか？

うん、ちょっと話がうまくいってない箇所があるような気がします
がぼちぼちかと・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6499s/>

SEASON

2011年4月22日15時25分発行